

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第43回

万葉の川心

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

伊保麻呂の歌一首(巻第九 一七三五番歌)

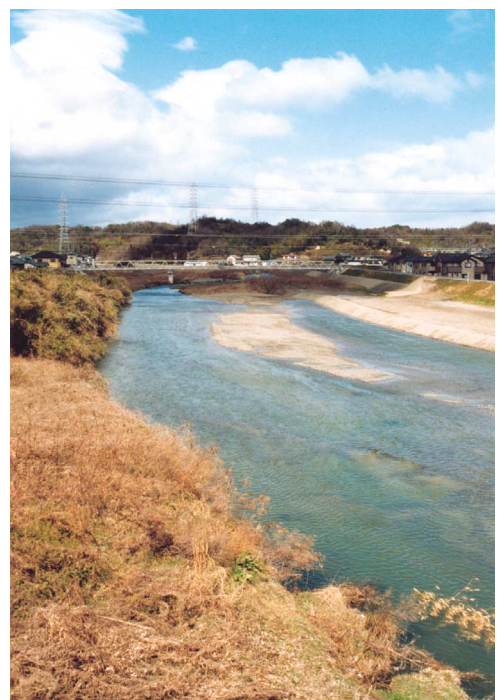
わが畳三重の川原の磯の裏に

かくしもがもと鳴く河蝦かも

鳥になりたい。魚になりたい。ボールとじゃれ合う飼い犬を見つめながら、「おまえはいいよなあ。」

と、ひとりごと。川原に腰を下ろして目を閉じると、音だけがかわりばんこに耳の中に訪れる。自転車のベル、ひばりの声、風の音、語らう人、草野球の歓声、電車の響き・・・遠くへ行きたい。自分以外のものになりたい。あだだったら、こうだったらいいのにと現実を目を瞑る。まじめに生きることに、懸命にやり遂げることは教わったけれど、適当に息を抜くこと、肩から力を抜く方法はどこかで教わったろうか。今ではどちらも大事のように思うけど、そのすべが分からない。缶コーヒード、(いや缶ビールで)まず、一杯。そして、前に横たわる川に少し愚痴をこぼしてみる。長年の友を前にしたように。

三重の枕詞には「畳」が使われている。わが畳を三重に重ね三重川の川原の岩に隠れてこうありたい、こうだったらいいのにと鳴く河蝦よ。カエルの鳴き声とされる「がも」は願望の助詞。磯の裏で、カエルたちが一斉に「ガモ、



ガモ」と鳴いていると考えると少し可笑しくなる。雨を恋うているのか、恋人を慕っているのか。風流の心にあつては、鳴き声も言の葉になり、岩にしみ入り、川に溶ける。万葉の歌は、自分の中にあつて知らずと、けれど脈々と流れている日本の心呼び覚ます。思えば自分は単独ではありえなくて、紛れもなく万葉の時代に生きた誰かと誰かの子孫である。千三百年前、歴史に名は残さないけれど、幸せに暮らした民の子孫・・・そう思いたい。

写真は、四日市市の内部川の川原である。川は市の西境、鈴鹿山脈の鎌ヶ岳に発して東南に流れ、市の南部の塩浜で伊勢湾に注いでいる。川に出合った瞬間、土手を駆け下りた。そしてぎりぎりまで川に近付いてシャッターを切った。懐かしい友にあつたような気がした。もうたくさん川の川と出合ったけれど、いつも印象が違う。だから川は止められない。

たまには羽目を外したり、たまにはズル休み。たまには無駄な一日を無駄に過ごしてはどうだろう。いい歳をした大人にも「放課後の自由時間」があつていい。息の抜き方も上手くならないと・・・人生は長いから。